

現職教育資料

- ◇ はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 1 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について
・・・・・・・・ 1～4
- 2 各教科等における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について
・・・・・・・・ 5～19
- ◇ おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20



シリーズ「新学習指導要領」 No.4

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善



◇ はじめに

新学習指導要領では、各学校において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開することが求められています。その際、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学習の過程を重視することとされています。

今回は、主体的・対話的で深い学びの実現のために留意すべき点について解説するとともに、各教科等における授業改善のポイントや具体的な授業づくり、単元（題材）構成などについて学習指導要領を踏まえて説明します。各学校での授業改善に御活用願います。

1 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現とは

「主体的・対話的で深い学び」とは具体的にどのようなことを意味しているのか、中央教育審議会答申に示されている以下の①～③にある三つの視点に立った授業改善について解説します。

① 「主体的な学び」の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

【解説】

「自己のキャリア形成と関連付けながら」とあるように、授業展開の中で各単元や題材が、児童生徒の将来にどのように関わってくるのかを意識させることが重要になります。

児童生徒に教科等を学ぶ意義を伝えていくためには、教師自身がその意義をよく考えておかなければなりません。実社会における様々な事象との関連性を意識して授業を展開することが、児童生徒に将来の自らのキャリア形成へのつながりを意識させることにつながり、その関心や意欲を引き出し、「主体的な学び」につなげていくことが期待されます。

各教科等で学ぶことと日常生活を結び付ける授業の展開は様々な考えられますが、そのためには、教師が社会の様々な課題と各教科等の関連性に十分意識を払い、様々な職業や経験を有する人から話を聞いたり、ニュースや書物等を通じて幅広い情報を収集したりすることが重要となります。

② 「対話的な学び」の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【解説】

「対話的な学び」の視点とは、他者の考えに触れることで、自己の考えを広げたり深めたりする視点です。児童生徒一人一人が自ら考えることはもちろん重要ですが、他者の考えに触れることは、新たな気付きや発見をもたらし、自らの思考の長所や短所を明らかにするなど、多くのメリットが期待されます。

そのため、児童生徒同士でグループ活動の機会を設けたり、教員や地域住民と児童生徒がディスカッションする機会を設けることなど様々な形の対話を行うことが考えられます。また、ここで言う「対話」とは、実際に話し合うことだけでなく、書物などを通じて先哲の考えに触れることも含まれると考えられます。

③ 「深い学び」の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

【解説】

「深い学び」を考える上で重要なのは、今回の学習指導要領改訂の背景となった時代認識です。今回の改訂は、概ね2020年～2030年頃にかけて初等中等教育を受ける子どもたちを想定しているものですが、この時代において想定される重要な技術革新として、A I（人工知能）があります。

A Iに関する未来予測には様々なものがありますが、当面の間A Iに発揮することが不可能と考えられる高度な能力、別な言い方をすれば、人間が強みを発揮することが期待される能力こそが、ここで「深い学び」として挙げられている「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」といったことです。

例えば、「江戸幕府が崩壊したのは何年か」といった単純な一問一答式の表面的な知識を問うような問題は、A Iが得意とするところです。一方で「江戸幕府が崩壊した主な理由を説明しなさい」といった思考力を問う問題では、欧米諸国のアジア進出や幕政改革の行き詰まり、新たな思想や学問の影響といった知識を基に、限られた字数の中で各事象の相対的な重要性や相互の因果関係を判断した上で、簡潔かつ論理的な文章として表現することが求められます。これこそが人間が発揮する強みであり、人間に期待される能力なのです。だからこそ、「深い学び」の視点が必要になってくるわけです。

これら「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点は、子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものでもあります。学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意することが必要です。

単元や題材のまとまりの中で、子供たちの学びがこれら三つの視点を満たすものになっているか、それぞれの視点の内容と相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し、改善していくことが求められます。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する上での留意点

子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められます。

また、学習指導要領解説のうち総則編には、以下のような規定が設けられています。

小（中）学校学習指導要領 総則第3の1(1)

第1の3の(1)から(3)までに示すことが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童（生徒）の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。

特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、児童（生徒）が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

そこで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項6点について解説します。

- ① 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。

【Point】

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点は、授業改善の視点として全く新しいものではありません。力のある教師が行ってきた取組の中から普遍的な要素を言語化したものです。

- ② 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

【Point】

今回の学習指導要領改訂では、育成を目指す資質・能力を三つの柱で整理し、これらに基づいて各教科等の目標・内容を再整理していますが、三つの柱のバランスのとれた育成のための授業改善であることに改めて留意してください。

- ③ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

【Point】

「主体的学び」の視点と「対話的な学び」の視点は、いずれも重要な視点ですが、質の高い学びにつなげていくための十分条件であるとは言えません。すなわち、これらの視点を重視した授業展開を行うに際しては、外形的な部分のみに着目してしまうことがないように、十分留意しなければなりません。

例えば、「主体的な学び」の視点に関連して、児童生徒が粘り強く学習に取り組んでいるからといっても、それだけで直ちに質の高い学びにつながっているとは言えません。何時間、何十時間とひたすら学習に取り組んでも、結局何も分からないままに終わってしまうこともあるかもしれません。

教師が振り返りの機会を設けていても、効果的に活用されていない場合もあります。

「対話的な学び」の視点についても同様であり、子ども同士のグループ活動やディスカッション等の機会があるからといって「活動あって学びなし」となってしまうかも知れません。「対話」が本当に質の高い学びにつながっているのか不断の検証を行っていく必要があります。

改めて、こうした学びの在り方それ自体が、「これだけやっておけば大丈夫」といった十分条件的な理解にならないことに留意する必要があります。

- ④ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

【Point】

この背景には、これまで授業改善の視点が、1単位時間当たりの授業改善という限られた範囲に集中しがちであったことがあります。

すなわち、1単位時間の中で、例えば、授業の見直しを得る機会が設けられているか、授業にグループ活動やディスカッションなどの機会が設けられているか、教師が教える場面と児童生徒が考える場面が設けられているか、振り返りの機会が設けられているか、といった様々な要素を全て満たすことは困難ですし、そもそも、そのようにすることは必ずしも適切とは言えません。

重要なことは、1回1回の授業の中であらゆる要素をもれなく取り入れるのではなく、単元や題材のまとまりといった複数回にわたる授業において、こうした要素を適切・効果的に配置していくことです。

- ⑤ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

【Point】

「深い学び」を進めていく上で重要になるのが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」です。

「見方・考え方」は、それ自体が資質・能力に含まれるものではなく、あくまでも、資質・能力を育成していく上で活用すべき「視点や考え方」です。したがって、「養う」べきものではなく、「働かせる」ものとなります。

現在検討されている学習評価の仕組みにおいても、評価の対象となるのはあくまでも資質・能力であり、「見方・考え方」それ自体を評価の対象項目とすることはありません。

- ⑥ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。

【Point】

授業内容が十分理解できていない児童生徒に対して、ひたすら粘り強く取り組むことを求めたり、グループ活動やディスカッション等への積極的な参加を求めても、本人の学びが深まる可能性は低く、クラス全体で考えても、効果的な授業展開になるとは考えにくいです。

児童生徒の理解状況を的確に把握しながら、教師が教える場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面をどこに設定するか、グループ活動を行うのであれば、その場面をどこに設定するか、といったことを、「単元や題材などの内容や時間のまとまり」ごとに考えていく授業デザインを改めて意識する必要があります。

2 各教科等における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について

国語科（小・中）

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の実現に向けて

- ◎ 児童生徒が学習の目的や必要性を意識して、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を見取り自覚することができる場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- 見通しを立てる場面を、単元のはじめまたは一単位時間のはじめに位置付ける。
 - ・「何のために学習するか(目的)」、「何を学習するのか(内容)」、「どのような活動により学習を進めるのか(方法)」について、児童生徒と確認して学習の目的を理解させ、身に付けたいと思えるように工夫する。
 - ・教材の提示の仕方、教師の発問、学習活動の工夫などにより、「言葉」に着目し、「言葉」を追究していこうという意識を一層引き出していくようにする。
- 振り返りの場面を位置付け、一単位または単元全体の振り返りを行う。
 - ・自分の学びや変容に気付かせることにより、次の学びにつなげようとする意識を高める。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の実現に向けて

- ◎ 対話によって自分の考えを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- 互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることにより、自身の考えを広げたり深めたりできるような場面を検討し、適切な学習活動（言語活動）を計画的に設定する。
 - ・ペアやグループでの話し合いが、単なるおしゃべりになったり、それぞれが発表して終わりになってしまう傾向があるので、学習効果を考え、言語活動を適切に選択し組み合わせるようにする。
 - ・普段から話し合うときのルールや問いかけ方、言葉の使い方などを指導しておくことよい。
 - ・単元全体の学習課題に通じるような発問を提示したり思考の可視化を図ったりする。
(例) 本(物語文)を通して作者の考えに触れ、自分の考えに生かす学習の場合
 - ① 「なぜ主人公は最後に○○のような行動をとったのか？」等、物語全体を通して読み深めなければならない発問を投げかける。
 - ② 児童生徒に考えさせる。
 - ③ 互いの考えを可視化し比較しながら、自身の考えを広げたり深めたりする。→ ①②③それぞれに適切な学習活動を検討し、単元の中に位置付ける。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の実現に向けて

- ◎ 児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

《授業改善のポイント》

- 児童生徒が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか、問い直して理解し直したり、表現し直したりしながら思いや考えを深める学習を設定する。
(例) 「C読むこと」の領域において、二場面を提示し、登場人物の気持ちの変化等を考えさせる学習の場合
 - ① 教師は、物語を読むために必要な語句の意味や主語と述語との関係などを指導する。
 - ② 児童生徒に、登場人物の気持ちが表れていると考える言葉や文がどこにあるか考えさせる。

* ①の教師が教える場面と、②の児童生徒が考える場面とを適宜組み合わせ、設定することが重要となる。
- 「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら、自分の思いや考えを広げ、深めることができるような学習活動を検討し、設定する。
 - ・思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにする学習活動を、計画的に設定する。

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に向けての移行期間中の三つのステップ

- 育成を目指す資質・能力を明確にする。
 - ・[知識及び技能]、[思考力、判断力、表現力等]の指導事項等から指導のねらいの重点化を図る。
 - ・指導事項等を有機的に組み合わせる単元化を図る。
- 資質・能力を育成する質の高い言語活動を位置付ける。（※ ①→⑤の順に実施）
 - ①児童生徒の実態の状況(つまずき)把握 ②指導事項(資質・能力)の明確化 ③適切な言語活動の位置付け
 - ④単元の目標、評価規準の設定 ⑤単元の学習過程の構想(評価規準・評価方法)
- 国語科で育成すべき資質・能力と他教科との関連を図る。(カリキュラム・マネジメント)
 - ・育成すべき資質・能力の系統性を理解する。(前学年、当該学年、次学年、小学校と中学校間の系統性)
 - ・教科横断的な視点をもって国語科と他教科の指導事項について関連を図り、教材の配列を構想する。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の実現に向けて

- ◎ 「主体的な学び」の実現に向けては、「学習問題（※注）は、何を問うているのか」、「その学習問題を解決するためには何を調べ、どう考えていけばよいのか」といった問題解決（※注）の見通しを児童生徒にもたせることが大切になる。この見通しをもてないと、学習が最終局面に差し掛かったときでさえ、「先生、今日は何を教えてください」と受け身であり、児童生徒の中で前時と本時はつながらず、「主体的な学び」が成立しないことになる。

※注 小学校…学習問題、問題解決 中学校…学習課題、課題解決

《授業改善のポイント》

- 学習問題（問い）を把握させる（例：小学校第3学年 販売の仕事「スーパーマーケット」）

素朴な気付きや疑問から学習問題（問い）を設定する

- ① 教師が写真、グラフ、チラシの提示する。
- ② 児童が「なぜ、こんなにたくさんの種類の商品を並べているのか。」「なぜ、〇時にお客さんがたくさん来るのか。」「なぜ、先着〇〇名だけなのか。」などに気付き、疑問を表現する。
- ③ 教師が「そうですね、お客さんを集める工夫がありそうですね。」と言いながら、学習問題（問い）「スーパーマーケットは、どのようにしてお客さんを集めているのだろう。」を設定する。
- ④ 児童の予想が始まる。

学習問題（問い）そのもののイメージをできる限り共有する

- ① 教師が「みなさんがお客さんだったら、どのようなお店に行きたくありませんか？」「たくさんのお客さんが来るお店ばかりではないですよね。」「では、なぜ、スーパーマーケットにはお客さんがたくさん来るのでしょうか？」などと学習問題（問い）を児童の思考に沿ったり、生活経験になぞらえたりしながら考えさせる。
- ② 児童の予想が始まる。

- 予想することの重要性に着目する

予想には、過去の自分の知識と現在の解決すべき課題を結び付ける働きがある。つまり、自分が「もっているものを使って解決しよう」とする営みである。「もっているものを使えば解決できそうだ」といった意識は、「主体的な学び」につながるはずである。こうした意識を経験的に育てていくのが「予想する」ことの大きな意義である。児童生徒が、生活経験や既習事項を活用して予想することが困難な内容であるなら、予想の「手掛かり」としての情報や資料を教師が提供していくとよい。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の実現に向けて

- ◎ 「対話的な学び」の実現に向けては、「深い学び」との関わりに留意し、その改善を図る必要がある。社会科においては、これまでも「学び合い」、「関わり合い」といった言葉を通じて、様々な協働的な学びを重視してきた。その一方で、話し合いや討論等の指導が十分に行われず、グループによる活動が優先し、内容が深まらないという課題も見られた。

《授業改善のポイント》

- 「つなぐ」ための「やりとり」を重視する

教師が児童生徒の発言に対し「もう少し説明を付け足して…」と促したり、「他の説明の仕方ができる人はいますか？」「AさんとBさんの意見は少し違うけれど、みなさんはどちらに近いですか？」などと問い掛けたりして、児童または生徒同士のやりとりを促すことが大切である。

- グループなどで直接話し合うことの目的や必然性を自覚できるようにする

必要なのは、「グループで話し合いなさい。」という指示ではなく、話し合いの目的となるべき「問い」である。また、力を合わせないと解決できないという必然性である。

児童生徒は、「なぜ、話し合う必要があるのか。」「なぜ今、グループを作るのか。」と内心では思っているかもしれない。その心の中を無視して指示だけで活動を進めようとするのは、対話的どころか主体的な学びにもならない。教師が、児童または生徒同士の予想のずれを明確にしたり、話し合うべき「問い」を確認したりすることが大切である。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の実現に向けて

- ◎ 「深い学び」の実現に向けては、「社会的な見方・考え方」を働かせるように授業を設計することが求められる。児童生徒が「社会的な見方・考え方」を働かせ、考え（考察し）たり、

選択・判断（構想）したりする問題解決的な学習を展開できるよう、学習問題（問い）と資料で方向付けを行うことが大切である。

《授業改善のポイント》

○ 学習問題（問い）の構成の工夫

次のような問いを設けて、様々な視点に着目させ、社会的事象の様子や仕組み、特色、意味などを捉え、児童生徒が社会への自分たちの関わり方を選択・判断（構想）できるようにする。こうした問いを単元の学習過程の中で、どのように設定するのが大切である。

		考えられる視点	視点を生かした、考察や構想に向かう「問い」の例
小 学 校		○位置や空間的な広がり (分布、地域、範囲 など)	・どのように広がっているのだろう。 ・なぜ、この場所に集まっているのだろう。
		○時期や時間の経過 (起源、変化、継承 など)	・いつ、どんな理由で始まったのだろう。 ・なぜ、変わらずに続いているのだろう。
		○事象や人々の相互関係 (工夫、関わり、協力 など)	・どのような工夫や努力があるのだろう。 ・なぜ、○○と□□の協力が必要なのだろう。
		※「選択・判断」	・これからはどのように続けていくことがよいのだろうか。 ・自分たちはどのような関わるができるだろうか。
中 学 校	地	○位置や分布	・どのような位置関係にあるのだろう。 ・なぜ、そこに位置するのだろう。
		○場所	・それはどのような場所なのだろう。
		○人間と自然の相互依存関係	・そこでの生活は、周囲の自然環境からどのような影響を受けているのだろう。 ・なぜ、そのような影響を与えているのだろう。
	理	○空間的相互依存作用	・そこは、それ以外の場所とどのような関係をもっているのだろう。 ・なぜ、そのような結び付きをしているのだろう。
		○地域	・その地域は、どのような特徴があるのだろう。 ・なぜ、この地域はそうなったのだろう。
		※「選択・判断（構想）」	・どのような地域にするべきなのだろうか。
学 校 史	歴	○時期や年代	・いつ（どこで、誰によって）起こったのだろう。
		○推移	・前の時代とどのように変わったのだろう。
		○比較	・どのような時代だったのだろう。
		○相互の関連や現代とのつながり	・なぜ、起こった（何のために行われた）のだろう。 ・どのような影響を及ぼしたのだろう。
		※「選択・判断（構想）」	・なぜ、そのような判断をしたと考えられるか。 ・歴史を振り返り、よりよい未来を創造するために、どのようなことが必要だろうか。
公 民		○現代社会を捉える	・なぜ、市場経済という仕組みがあるのだろう。 ・どのような機能（役割）があるのだろう。
		○社会に見られる課題の解決を構想 ※「選択・判断（構想）」	・社会保障とその財源確保の問題をどのように解決していったらよいのだろうか。 ・世界平和と人類の福祉増大のためにどのようなことができるだろうか。

○ 資料提示の工夫

社会科では、これまでも地図や年表、図表などから情報を読み取ることを重視してきた。したがって、これまでどおり、こうした資料を必要な場面で十分に生かしていくことが大切である。しかし、ただ地図を見せれば、児童生徒が空間的な広がりに着目するわけではない。年表を見せれば、時間の経過に着目するわけではない。資料の適切な加工の仕方や提示の仕方が必要になる。

例えば、分布、広がり、自然条件に着目させるにはどのように提示したらよいか。起源、経緯、変化に着目させるにはどのように提示したらよいかなど、視点を意識して資料を提示することが大切になる。

比較・分類、総合、関連付けについても、「比較しなさい」、「関連付けなさい」では、児童生徒が見方・考え方を働かせたことにはならない。児童生徒が比較し、関連付けられるように資料を提示することが大切になる。

○ 対話的な学習活動の工夫

授業では、児童生徒の交流によって、多様な見方・考え方へと鍛えられていくことも大切にしたい。そもそも教師が地図を示しても、「つながり」や「協力」に着目したり、「時期」や「持続性」に着目したりするなど、児童生徒の見方は多様である。児童生徒の自由な発言や意見交換などによって、様々な視点で捉えられることに気付いていくことが大切である。

このことが社会への関わり方を選択・判断（構想）する際に生かされることになる。多様な意見や解釈の中から自分の判断で結論を選ぶことができるようになるためにも、対話的な学習活動が大切である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点

- ◎ 児童生徒自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりしているか。

《授業改善のポイント》

- 主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面を設定する。
- ・児童生徒が既習内容を基に自ら問題を見いだしたり、その問題の結果を予想したりする場面を設定する。
 - ・問題を解決するために、既習の何を用いてどのように表したり処理したりする必要があるのかについて児童生徒が構想する場面を設定する。
 - ・本時や単元を通して学習したことや問題を解決した過程を振り返り、目標が達成できたかを確認する場面（適用問題の実施や振り返りシートの記入など）を設定する。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点

- ㊦ 数学的な表現を柔軟に用いて表現し、それをを用いて筋道を立てて説明し合うことで新しい考えを理解したり、それぞれの考えのよさや事柄の本質について話し合うことでよりよい考えに高めたり、事柄の本質を明らかにしたりするなど、自らの考えや集団の考えを広げ深めているか。
- ㊧ 事象を数学的な表現を用いて論理的に説明したり、よりよい考えや事柄の本質について話し合い、よりよい考えに高めたり事柄の本質を明らかにしたりしているか。

《授業改善のポイント》

- 対話によって児童生徒が自分の考えなどを広げたり深めたりする場面を設定する。
- ・考え方やアイデアを共有するために小集団などで話し合ったり、問題解決の結果や過程などを学級全体で共有したりする場面を設定する。
- 数学的な表現を用いて説明することで、児童生徒が簡潔・明瞭・的確に自分の考えを表現できることを実感する場面を設定する。
- ・具体物、図、言葉、数、式、表、グラフなどの数学的な表現を用いて、問題解決の結果や過程、見いだした数や図形の性質などについて、自分の考えを説明させるようにする。
- 児童生徒一人一人の考えや表現を学級全体で練り合うことにより、客観的で合理的な説明に高め合う場面を設定する。
- ・お互いの考えを伝え合う時には、何に着目して解決したかなど理由や根拠を基に筋道を立てて説明させるようにする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点

- ㊨ 日常の事象や数学の事象について、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して問題を解決するよりよい方法を見いだしたり、意味の理解を深めたり、概念を形成したりするなど、新たな知識・技能を見いだしたり、それらと既習の知識と統合したりして思考や態度が変容しているか。
- ㊩ 数学に関わる事象や、日常生活や社会に関わる事象について、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見いだしたりするなど、新たな知識・技能を身に付けたり、それらを統合したりして思考や態度が変容しているか。

《授業改善のポイント》

- 単元など内容や時間のまとまりの中で、学びの深まりをつくりだすために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面を設定する。
- 既習事項を活用して問題を解決し、得られた結果の意味を元の事象や既習の知識と結び付けて捉え直し、知識や方法を統合し、更に発展する場面を設定する。
- ・問題を解決した後に、振り返ることによって、他に分かることがないか考えたり、問題解決の過程から本質的な条件を見だし、それ以外の条件を変えたり、類似する事柄の間に共通する性質を見いだしたりすることで、新たな問題の発見を児童生徒に促すようにする。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

（※下線部は中学校における視点の内容）

「主体的な学び」の視点

- ◎ 自然の事物・現象から問題を見だし、見通しをもって課題や仮説の設定をしたり、観察・実験の計画を立案したり、観察、実験などを行っているか。
- ◎ 観察、実験の結果を基に、分析し解釈して仮説の妥当性を検討するなど考察を行い、より妥当な考えをつくりだしたり、全体を振り返って改善策を考えたりしているか。
- ◎ 自らの学習活動を振り返って意味付けたり、得られた知識や技能を基に、次の問題や課題を発見したり、新たな視点で自然の事物・現象を捉えようとしたりしているか。

《授業改善のポイント》

- 自然の事物・現象から問題を見だし、見通しをもって観察、実験などを行っているか。
 - ・問題や課題が、児童生徒自らが見いだしたものとなるようにする。
 - 解決したいという意識を高める。
 - ・見いだした問題について、自分なりの予想や仮説がもてるようにする。
 - 自分の考えに対する検証意欲を高める。
- 新たな視点で捉えようとする得られた知識や技能を基に、次の問題を発見したり、新たな視点で自然の事物・現象を捉えようとしたりしているか。
 - ・得られた知識を基に、再度自然の事物・現象に対して関わる場を設けたり、考えさせたりする。
 - 自然の事物・現象への更なる興味・関心や積極的に関わろうとする意欲を高める。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

（※下線部は中学校における視点の内容）

「対話的な学び」の視点

- ◎ 問題（課題）の設定や検証計画の立案、観察、実験の結果の処理、考察の場面などでは、あらかじめ個人で考え、その後、意見交換したり、科学的な根拠を基にして議論したりして、自分の考えをより妥当なものにする学習となっているか。

《授業改善のポイント》

- あらかじめ個人で考え、その後、意見を交換したり、根拠を基にして議論したりして、自分の考えをより妥当なものにする学習となっているか。
 - ・「実証性」、「再現性」、「客観性」などといった条件を検討する手続きを重視しながら、問題を科学的に解決できるようにする。
 - 互いの考えを尊重し、既存の考えをより科学的なものに変容させていく話し合いを充実させる。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点

- ◎ 「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決の過程を通して学ぶことにより、理科で育成を目指す資質・能力を獲得するようになっているか。
- ◎ 様々な知識がつながって、より科学的な概念を形成することに向かっているか。
- ◎ 新たに獲得した資質・能力に基づいた「理科の見方・考え方」を、次の学習や日常生活などにおける問題発見・解決の場面で働かせているか。

《授業改善のポイント》

- 「理科の見方・考え方」を働かせながら問題解決の活動を行っているか。
 - ・それぞれの領域における特徴的な視点を踏まえた活動を取り入れる。（生命領域では共通性と多様性など。ただし、領域固有のものではないことに注意。）
 - ・比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて、問題を見いだしたり、振り返ったりするといった探究の過程を充実させる。
- 様々な知識をつないで、より科学的な概念を形成することに向かうような展開になっているか。
 - ・内容や時間のまとまりの中で、個別の知識をつないで、学習内容の理解を目指すような単元を構想する。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点

- ◎ 表現を行い伝え合う活動の充実を図っているか。

《授業改善のポイント》

- 児童の生活圏である学校・家庭・地域を学習の対象や場とし、対象と直接関わる活動を行うことで、興味や関心を喚起し、自発的な取組を促すようにする。
- 小学校低学年は、自らの学びを直接的に振り返ることは難しく、相手意識や目的意識に支えられた表現活動を行う中で、自らの学習活動を振り返る。そのことで自分自身の成長や変容について考え、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性について気付いていく。自分自身への気付きや、自分自身の成長に気付くことが、自分は更に成長していけるという期待や意欲を高めることにつながる。学習活動の成果や過程を表現し、振り返ることで得られた手応えや自信は、自らの学びを新たな活動に生かし挑戦していこうとする児童の姿を生み出す。こうしたサイクルが「主体的な学び」に向かう力を育成するものと捉え、指導に生かすようにする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点

- ◎ 他者との協働や伝え合い交流する活動により、児童の学びを質的に高めているか。

《授業改善のポイント》

- 生活科では、身の回りの様々な人々と関わりながら活動に取り組んだり、伝え合ったり交流したりすることを大切にす。伝え合い交流する中で、一人一人の発見が共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きが生まれたり、関係が明らかになったりすることを踏まえ、他者との協働や伝え合い交流する活動により、児童の学びを質的に高めるようにする。
- 双方向性のある活動が行われ、対象と直接関わり、対象とのやり取りをする中で、感じ、考え、気付くなどして対話的な学びが豊かに展開されるようにする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点

- ◎ 気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得する学びを実現しているか。

《授業改善のポイント》

- 思いや願いを実現していく過程で、一人一人の児童が自分との関わりで対象を捉えていくようにする。
- 「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かした学習活動が充実することで、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得するなどの深い学びを実現するようにする。
- 低学年らしいみずみずしい感性により感じ取られたことを、自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連付けて捉えようとしたりすることを助けるような教師の関わりを実現していくようにする。

主体的・対話的で深い学びの視点として気付きの質を高めるためには、以下の四つが必要である。

- ① 試行錯誤や繰り返す活動を設定する
- ② 伝え合い交流する場を工夫する
- ③ 振り返り表現する機会を設ける
- ④ 児童の多様性を生かし、学びをより豊かにする

生活科の学習指導は、これまでと同様に、児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させるとともに、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用を意識することが大切である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点の例

- ◎ 主体的に学習に取り組めるよう、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- 学習内容への興味・関心を喚起するとともに、基礎的な理解を促す中で、実感を伴った理解を通して、学習活動への期待を膨らませるように導く。
 - ・音や音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚できるようにすることが大切であり、音や音楽によって、児童生徒の心を動かすような提示が原動力となる。
- 児童生徒一人一人が、自分の（グループの）課題を明確にし、課題を解決するための方法を理解できるようにする。
 - ・イメージや感情を喚起させる要因となった音楽の構造や歌詞、曲の背景などとの関わりを考えさせる。
- 学びの見通しをもち、安心して学習に取り組めるようにする。
 - ・表したい音楽表現や音楽のよさや美しさなどを見いだすことに関する見通しをもたせる。
 - ・音や音楽によって児童生徒の心を動かすような場面を設定した上で取り組ませ、実感を伴った気付きとなるよう手立てを工夫する。
- 学んだことの意味や価値、自分の変容を自覚できるようにし、次の学びにつなげる。
 - ・学んだことを、次時や他の教材においても生かすよう、提示の仕方を工夫する。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点の例

- ◎ 対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において、心が動くような場面を設定した上で進める。

- 児童生徒一人一人に、自分の考えをもたせる。
 - ・短時間であっても、自分でしっかりと考えさせる時間を保証する。
- 根拠をもった考えを基に対話させる。
 - ・日頃から、音楽表現に対する思いや意図、鑑賞で見いだした曲のよさや美しさなどについて、音楽を形づくっている要素とその働きなどと関わらせながら、根拠をもって自分の考えを伝えることができるような手立てを工夫する。
- 共有、共感する過程を大切にす。
 - ・グループでの対話を通して表現をつくり上げていく過程などにおいて、気付いたことや感じたことについて言葉や音楽で伝え合い、音楽表現のよさを共有し、共感していく。
 - ・言葉だけのやりとりにならないよう、実際に音や音楽で確認しながら、実感を伴った学習を進めていくことが重要である。
- 対話の対象を広げる。
 - ・友達との対話のほか、必要に応じて、地域の方や音楽作品等を通じた先哲の対話に触れる。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の例

- ◎ 学びの深まりをつくり出すために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

《授業改善のポイント》

- 学習の過程において、児童生徒が「音楽的な見方・考え方」を働かせることができるような場面設定や発問など、効果的な手立てを講じることが大切である。
 - 児童生徒が自分の力だけで音楽に対する感性を働かせたり、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えたりすることが難しい場合は、以下のような方法も考えられる。
 - ・児童生徒が、音楽活動における具体的内容に対して、課題と解決方法を知ることができるような手立てを講じることで、学びの質を高めていく。
- 〈グループ活動を設定する場合〉
 - ①学び合いの中からどのような気付きが生まれるか予測し、グループにする必要性、価値、グループだからこそ獲得できる資質・能力を明らかにする。
 - ②児童生徒にゴールとなる演奏や鑑賞のイメージができていないか、そのために必要な解決方法が身に付いているかなど、児童生徒の実態を踏まえる。
 - ③教師はゴールを示し、児童生徒の解決方法を増やしてから、グループ活動を設定する。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

従前の音楽科の学習における本質的な考え方を継承し、音楽的な感性を働かせ、思考・判断し表現するという一連の過程を大切に学習を充実させることを踏まえて、授業改善を行うことが大切である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点

- ◎ 児童生徒にとって、身近で必要感のある題材等を設定するとともに、見通しを立てて学習に取り組めるようになっているか。その上で、児童生徒が自らの変容を自覚できるような振り返りの機会が設定されているか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ 児童が「この材料でどんなことができるか、いろいろやってみよう。つくりかえることもできるんだ。」などの見通しがもてるようにする。
 - ・教師が指示することに終始するのではなく、児童がやってみたいことができるよう、指導を工夫する。
- ㊧ 美術を学ぶことの必要性を実感し、目的意識を高めるような題材の設定や授業の工夫をする。
 - ・例えば、複数のアイデアを考えるときに、それをまとめていく過程が確認できるようなワークシートを工夫したり、自分としての意味や価値を具現化していく過程が認識できるような自己評価の機会を指導計画に位置付けたりする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点

- ◎ [共通事項] に示す事項を基に、表現活動において発想や構想に対する意見を述べ合ったり、鑑賞活動において自ら感じたことや考えたことを大切にし、作品等を見ながら、授業のねらいに沿った言語活動を行ったりできているか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ 表現の活動では、はじめに一人で材料と関わる時間をつくり、自分で考え、その上で、一人一人の気付きなどを基に、自然に発想を交流し合ったり話し合ったりできるようにする。
 - ・鑑賞の活動では、互いの作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり、児童自身が感じたり考えたりすることを大切にする。
- ㊧ 生徒同士の見方や感じ方、考え方などが交流され、新しい見方に気付いたり、価値を生み出したりすることができるような言語活動の充実を図る。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点

- ㊦ 表現活動において、育成を目指す資質・能力を明確にした、「つくり、つくりかえ、つくる」学習活動が担保されているか。
- ◎ 造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実が図られているか。また、学習のねらいに即した言語活動の充実が図られているか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ 「この形でいいか」、「自分の表したいことは表せているか」など自分の行為や活動を振り返り、感じたり考えたりすることができるようにする。
 - ・造形遊びをする活動では、実現したい思いを試したり、叶えたりすることができる材料、場所、時間などを設定する。
- ㊧ 自己との対話を深めることや、表現において発想や構想に対する意見を述べ合ったり、鑑賞において作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合ったりすることができるようにする。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点の例

- ◎ 主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ ・ 題材を通して見通しをもち、日常生活の課題の発見や解決に取り組んだり、基礎的・基本的な知識及び技能の習得に粘り強く取り組んだり、実践を振り返って新たな課題を見付け、主体的に取り組む態度を育むようにする。
- ・ 学習した内容を実際の生活で生かす場面を設定し、自分の生活が家庭や地域と深く関わっていることを認識したり、自分の成長を自覚して実践する喜びに気付いたりすることができる活動などを充実させるようにする。
- ㊦ ・ 現在及び将来を見据えて、生活や社会の中から問題を見いだし課題を設定し、見通しをもって解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って実践を評価・改善して、新たな課題に主体的に取り組む態度を育むようにする。
- ・ 学習した内容を実際の生活で生かす場面に設定し、自分の生活が家庭や地域社会と深く関わっていることを認識したり、自分が社会に参画し貢献できる存在であることに気付いたりする活動に取り組むようにする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点の例

- ◎ 対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ 児童同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々などとの会話を通して考えを明確にしたりするなどして、自らの考えを広げ深める学びができるようにする。
- ㊦ 他者と対話や協働をする中で、自らの考えを明確にしたり、広げ深めたりする学びができるようにする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の例

- ◎ 学びの深まりをつくり出すために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

《授業改善のポイント》

- ㊦ 児童が日常生活の中から問題を見い出して課題を設定し、その解決に向けて様々な解決方法を考え、計画を立てて実践し、その結果を評価・改善し、さらに家庭や地域で実践するなどの一連の学習過程の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、課題の解決に向けて自分なりに考え、表現するなどして資質・能力を身に付けることができるようにする。
- ㊦ 生徒が生活や社会の中から問題を見い出して課題を設定し、その解決に向けた解決策の検討、計画、実践、評価・改善といった一連の学習活動の中で、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得することができるようにする。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

- ◎ 児童・生徒や学校の実態、指導の内容に応じ、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から授業改善を図ることが重要である。
- ◎ 題材など内容や時間のまとまりを見通して、授業全体をデザインすることが重要である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点の例

- ◎ 題材など内容や時間のまとまりの中で、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- 現在及び将来を見据えて、生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、見通しをもって解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って実践を評価・改善して、新たな課題に主体的に取り組む態度を育むようにする。
- 学習した内容を実際の生活で生かす場面に設定し、自分の生活が家庭や地域社会と深く関わっていることを認識したり、自分が社会に参画し貢献できる存在であることに気付いたりする活動に取り組むようにする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点の例

- ◎ 題材など内容や時間のまとまりの中で、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。

《授業改善のポイント》

- 他者と対話や協働する中で、自らの考えを明確にしたり、広げ深めたりする学びができるようにする。
※ 技術分野では、直接他者との協働を伴わなくとも、既製品の分解等の活動を通して、その技術の開発者が設計に込めた意図を読み取るといったことも対話的な学びとなる。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の例

- ◎ 題材など内容や時間のまとまりの中で、学びの深まりをつくり出すために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。

《授業改善のポイント》

- 生徒が、生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けた解決策の検討、計画、実践、評価、改善といった一連の学習活動の中で、技術の見方・考え方を働かせながら課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得する学びとなっているようにする。
- 生活や技術に関する事実的知識が概念的知識として質的に高まったり、技能の習熟・定着が図られるようにする。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点の例

- ㊦ 運動の楽しさや健康の意義等に気付き、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組み、考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促しているか。
- ㊧ 運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、学習を振り返るとともにそれを考察し、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促しているか。

《授業改善のポイント》

- 児童生徒の意欲が喚起されるような、思わずやってみたくなるような場や活動を提示する。
- 単元全体の見通しをもてるよう、具体的な学習の流れを分かりやすく提示する。
- 課題の例と、その課題を解決するための活動を提示する。
- 自己の学びの振り返りが確実にできるよう、具体的な事物をもとにした振り返りを促す。
- 学びの成果が実感できるよう、他者からの称賛を得られる機会を増やす。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点の例

- ㊦ 運動や健康についての課題の解決に向けて、児童が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促しているか。
- ㊧ 運動や健康についての課題の解決に向けて、生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深め、課題の解決を目指して学習に取り組むなどの対話的な学びを促しているか。

《授業改善のポイント》

- 児童生徒が課題を解決するために必要な言葉を引き出すための場や活動を意図的に仕組む。
- 思考・判断や対話のために必要な運動や保健に関する知識を、学習資料として段階的かつ効果的に提示する。
- 見合いや教え合いのポイントを提示したり、相談し合う観点を明確に示したりする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の例

- ㊦ 「主体的な学び」、「対話的な学び」の過程を通して、自己の運動や健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの深い学びを促しているか。
- ㊧ 習得・活用・探究という学びの過程を通して、自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの深い学びを促しているか。

《授業改善のポイント》

- やさしい課題に終始することなく、挑戦意欲を掻き立てるような課題を提示したり、いろいろな方法を試したりしながら自分なりの行い方を見付けていくことの大切さを伝えていく。
- 「技能」だけでなく、「思考・判断・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に関する様々な「分かる」、「できる」を実現していく。
- 習得した知識と具体的な活動（生活）を比較したり、関係性を考えたりする学習活動を取り入れ、共通点や違いに気付いたり、自己との関わりを意識し改善点を見付けたりするなどの学びが深まる活動を工夫する。

これらの三つの学びの過程をそれぞれ独立して取り上げるのではなく、相互に関連を図り、体育・保健体育科で求められる学びを一層充実させることが重要である。また、これら三つの学びの過程は、順序性や階層性を示すものでないことに留意することが大切である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の実現に向けて

- ◎ 外国語を学んだり、外国語でコミュニケーションを図ったりすることに興味や関心をもつこと。
- ◎ 外国語によるコミュニケーションを通して、生涯にわたって社会・世界と関わり、学んだことを生かそうとすること。
- ◎ 自らの学習やコミュニケーションを振り返り、次の学習につなげること。

《授業改善のポイント》

- コミュニケーションを図る目的、場面、状況等を明確に設定する。
 - ・例えば、好きな色、食べ物、テレビ番組等について友達と尋ね合う活動において、学級で一番人気がある色、食べ物、テレビ番組等を当てることを目的にするなど、何のために聞いたり読んだり、あるいは話したり書いたりするのかという目的、場面、状況を明確にする。
- 学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設定する。
 - ・単元のねらいや流れを児童生徒と共有する。
 - ・授業の終わりに本時の振り返りをするに加え、言語活動の前半と後半の間に、前半の活動でよかったペアのやり取りなどを取り上げ、どこがよかったかなどの振り返りをして後半の活動を行う。
- 発達の段階に応じて児童生徒が興味・関心をもつ題材を取り上げたり、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定したりする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の実現に向けて

- ◎ 単に言葉を使ったやり取りではなく、他者を尊重して情報や考えなどを伝え合い、その結果、自らの考えを深めたり、心が動いたりすること。
- ◎ 聞いたり話したりすることに加え、書かれたものを読んで社会や世界について知ったり、他者の考えを学んだり、自らの考えを深めたりすること。

《授業改善のポイント》

- 情報や考えや気持ちを他者と伝え合う活動を設定する。
 - ・機械的に練習したり、誰かになりきって話したり、架空の話をしたりするだけでなく、児童生徒自身の本当の考えや気持ちを伝え合う活動を設定し、言葉でコミュニケーションを図る大切さや楽しさが感じられるようにする。
- 他者の考えに触れて自身の考えを振り返ったり深めたりするよう促す。
 - ・情報のやり取りや、考えや気持ちの伝え合いの結果、自分の考えや気持ちがどうなったかを児童生徒に振り返らせる。
 - ・相手が言ったことに対して、相づちを打つ、聞き直す、相手の言葉を繰り返して確認するなど、話し手、聞き手を尊重したやり取りをさせる。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の実現に向けて

- ◎ コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて思考力、判断力、表現力等を発揮する中で、言語の働きや役割に関する理解や外国語の音声、語彙、表現、文法の知識がさらに深まり、それらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことにおいて実際のコミュニケーションで運用する技能がより確実なものとなること。
- ◎ 深い理解と確実な技能に支えられて、外国語教育において育まれる「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現する力が活用されること。

《授業改善のポイント》

- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱がバランスよく育成されるように、年間指導計画・単元計画を作成する。
 - ・どの場面でもどのような力を付けるかを吟味しながら作成する。
 - ・単元のゴールを指導者が思い描き、そのゴールに向けての計画を立てる。
- コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確にし、聞いたり読んだり、話したり書いたりする必然性のある言語活動を設定する。
 - ・例えば、自分のお薦めの本を伝える活動において、その本を読みたいという友達を一人でも多く見付けるといった目的を設定することで、どうすればその本を読みたいと思ってくれるかを考えて、既習表現から言葉を選び、話す内容の構成や話し方を工夫して友達に伝えようとするなど、思考を働かせ、判断し、表現することにつながると考えられる。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の視点の例

- ◎ 主体的に自分との関わりで考え、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりする「主体的な学び」が実現できているか。

《授業改善のポイント》

- 主題に対する問題意識をもたせるようにする。
 - ・児童生徒の身近な生活の中の問題や社会的問題を取り上げて意識をもたせる。
 - ・教材に描かれている問題を捉えさせ、考えてみたい話し合ってみようという意識をもたせる。
- これまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、自分との関わりで、更に考えを深めるようにさせる。
 - ・授業の導入、展開、終末において、日常生活の中で誰もが経験することや学校での共通体験等を想起しながら考えを深めさせる。
 - ・ねらいとする道徳的価値について児童生徒の実態を把握しておき、意図的に指名して自分との関わりで考えさせるなど、自分の体験から表現できるような問いかけを工夫する。
- 自己の生き方についての考えを深められるようにする。
 - ・これまでの生き方を振り返ったり、これからの生き方に希望をもったりできるような時間と空間をしっかりと確保する。
 - ・学習の過程や成果などの記録を、計画的にファイル等に蓄積するなど、学習状況を児童生徒が自ら振り返れるよう工夫する。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の視点の例

- ◎ 多様な感じ方、考え方と出会い交流する「対話的な学び」が実現できているか。

《授業改善のポイント》

- 他者と対話したり協働したりしながら、多様な感じ方や考え方に接することで、物事を多面的・多角的に考えられるようにする。
 - ・話し合い活動を取り入れたり、交流したりすることを通して、児童生徒同士、教師等大人との対話を促す。
 - ・資料を通じて先人の多様な生き方に触れたり、保護者や地域住民、専門家等の授業への参加を得たりするなどして、児童生徒が、道徳的価値の理解を深めたり、自己を見つめる学習につなげたりできるようにする。
 - ・主人公に共感して気持ちを考えさせる視点だけでなく、様々な登場人物の立場で考えさせたり、登場人物を客観的に捉えて考えさせたりする。
- 児童生徒の考えを整理し、その関係性を明らかにした構造的な板書等の工夫をし、児童生徒が自分の考えの立ち位置を知り、自分や友達の考えのよさや課題に気付くことができるようにする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の視点の例

- ◎ 自己を見つめ、多角的・多面的に考える学習活動において、「道徳的諸価値についての理解」と「自己の生き方についての考え」を、相互に関連付けることにより、自分の感じ方考え方をより明確にする「深い学び」が実現できているか。

《授業改善のポイント》

- ねらいとする道徳的価値について、教師が明確な意図をもって授業を行うようにする。
- 道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探求する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫する。指導方法の工夫としては、次のようなことが考えられる。
 - ・読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習では、教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的価値の理解を深める。
 - ・問題解決的な学習では、児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問などを通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる。
 - ・道徳的行為に関する体験的な学習では、役割演技など疑似体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

- ・道徳科が示す「主体的・対話的で深い学び」とは、言い換えれば「考え、議論する道徳」の実現である。「考える」とは、主体的に自分との関わりにおいて道徳的価値を考え、自分の感じ方や考え方を明確にすることである。「議論する」とは、多面的・多角的に考えて多様な感じ方、考え方と出会い交流することで、自分の感じ方、考え方をより明確にすることである。
- ・日頃から多様な意見を受け止め、認め合える学級の雰囲気を作ることが重要である。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の実現に向けて

- ◎ 探究的な学習過程の中で、課題設定と振り返りの充実を図っているか。

《授業改善のポイント》

- 課題設定については、児童生徒が自分のこととして課題を設定し、主体的な学びを進めていくことができるように、実社会や実生活の問題を取り上げるようにする。また、学習活動を見通して、ゴールと道筋を鮮明に描くことができるような学習活動を設定する。
- 振り返りは、児童生徒が自らの学びを意味付けたり、価値付けたり、他者と共有したりし、自己変容を自覚できるようにする。その際、言語によりまとめたり表現したりする学習活動を行うことにより、体験したものと収集した情報及び既存の知識が整理され、児童生徒一人一人の考えが深い理解につながるようにする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の実現に向けて

- ◎ 他者との協働や外界との相互作用を通じ、自らの考えを広げ深めるような学びの充実を図っているか。

《授業改善のポイント》

- 身に付けた知識や技能を使って相手に説明して話すことにより、知識や技能がつながりのある構造化された情報へ変容していけるようにする。また、他者からの多様な情報が供給されることにより、知識や技能の構造化が質的に高まるようにする。
- 他者とともに新たな知を創造する場の構築と、課題解決に向けた行動化について意識する。実際には、情報の質と量、再構成の方法等に配慮して、具体的な学習活動や学習形態、学習環境として用意する。
- 「考えるための技法」を意識的に使い、情報が「可視化」され、「操作化」されることにより、児童生徒が自ら学び、共に学ぶ姿を具現化できるようにする。
- 協働的な学習は、グループとして結果を出すことが目的ではなく、その過程を通じて、一人一人がどのような資質・能力を身に付けるかが重要であることに留意する。グループとして考えるだけでなく、一人一人が学習の見通しをもったり、振り返ったりできるようにする。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の実現に向けて

- ◎ 探究的な学習の過程を重視し、これまで以上に学習過程の質的向上を目指しているか。

《授業改善のポイント》

- 探究的な学習とするために、学習過程を探究の過程（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）として充実させ、繰り返していくようにする。また、探究の過程では、探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心に基づく学習を行うなど、創意工夫を生かした教育活動となるようにする。
- 「①課題の設定」については、児童生徒自らが実社会や実生活に向き合う中で、自ら課題意識を持ち、その意識が連続し発展することが欠かせないが、学習対象との関わり方や出会わせ方を工夫するなど、教師が意図的な働きかけを工夫する。
- 「②情報の収集」については、文献を調べて言語化された情報を手に入れたり、体験活動により感覚的な情報を獲得したりするなど、学習活動により収集する情報が異なることを意識する。また、課題解決のための情報収集を自覚的に行い、適切な方法で蓄積していくことにも配慮する。
- 「③整理・分析」については、収集した多様な情報を、整理・分析して思考する活動へと高めていく学習活動を位置付けるようにする。その際、児童生徒自身が情報を吟味する必要性を考え、適切な整理や分析の方法を決定できるよう配慮する。また、情報の整理・分析を意識的に行うために、「考えるための技法」を用いた思考ツールを活用することで、学習の質を高められるようにする。
- 「④まとめ・表現」については、相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり表現したりすること、活動自体が情報の再構成や自分自身の考えや新たな課題の自覚につながることで、伝えるための具体的な方法を選択し目的に応じて使えるようにすることなどに配慮する。

◆ 「主体的な学び」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の実現に向けて

- ◎ 学ぶことに興味・関心をもち、学校生活に起因する諸課題の改善・解決やキャリア形成の方向性と自己との関連を明確にしながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の活動を振り返りながら改善・解消に励むなど、活動の意義を理解した取組となっているか。

《授業改善のポイント》

- 学級や学校の実態、自己の現状に即して、自ら課題を見いだしたり、解決方法を決めて自主的に実践したり、その取組を振り返り、よい点や改善点に気付いたりできるような学習過程となるようにする。
- 集団や自己の新たな課題の発見や目標の設定が可能となり、生活を更によりよくしようという次の活動への動機付けとなるようにする。

◆ 「対話的な学び」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の実現に向けて

- ◎ 児童生徒相互の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方や資料等を手掛かりに考えたり話し合ったりすることを通して、自己の考え方を協働的に広げ深めているか。

《授業改善のポイント》

- 学級や学校における集団や自己の生活上の課題を見だし、解決するために合意形成を図ったり、意思決定したりする中で、話し合いを通して他者の様々な意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりする。
- 異年齢の児童生徒や障害のある幼児児童生徒等、多様な他者と対話しながら協働することや地域の人との交流を通して自分の考えを広げたり、自分のよさやがんばりに気付き自己肯定感を高めたりする。
- 自然体験を通して自然と向き合い、学校生活では得られない体験から新たな気付きを得ていく。
- キャリア形成に関する自分自分の意思決定の過程において、他者や教師との対話を通して自己の考えを発展させることなど、様々な関わりを通して完成を豊かにし、よりよい合意形成や意思決定ができるような資質・能力を育成する。

◆ 「深い学び」の視点からの授業改善

「深い学び」の実現に向けて

- ◎ 学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、新たな課題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることで、学んだことを深めているか。

《授業改善のポイント》

- 特別活動が重視している「実践」を、単に行動の場面と狭く捉えるのではなく、課題の設定から振り返りまでの一連の活動を「実践」と捉えていく。
- 各教科等の特質に応じた見方・考え方を総合的に働かせ、各教科等で学んだ知識や技能などを、集団及び自己の問題の解決のために活用していく。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて特に留意すること

- ・特別活動は他の教科のように「単元」や時間のまとまりがなく、また、各活動・学校行事が順番に行われるのではなく同時並行的に行われるものであるということを踏まえ、学級活動、児童会活動、生徒会活動、クラブ活動（小学校のみ）及び学校行事のそれぞれの年間指導計画の作成に当たり、各活動・学校行事を通して主体的・対話的で深い学びが実現するように組み立てること。
- ・「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点を重視すること。
- ・各活動・学校行事の特質や内容を踏まえつつ、活動の内容や活動形態を児童生徒が選択・決定することや、活動に必要な資料や情報等を自分たちで集め、活動の結果についても自分たちで振り返り評価するなど、主体的な活動を可能にすること。
- ・課題を解決するために話し合い、合意形成を図る場合には、他者の考え方を認め、自他の考えをつなぎながら、新たなものを構成員全員で生み出していけるようにすること。

◇ おわりに

「シリーズ『新学習指導要領』」No. 4では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について紹介しました。

主体的・対話的で深い学びは、「主体的」、「対話的」、「深い」のそれぞれに授業改善の視点を見いだすことができます。しかし、これらは相互に結び付いて授業がよりよいものになっていくことに留意する必要があります。特定の型や方法を目指すものではないことと同様に、「主体的でない対話」や「深い学びにつながる主体性や対話」等を目指しているものではないことも念頭に置いておく必要があります。

ぜひ、本資料を授業研究会等、学校全体で御活用ください。

【参考資料】

- 「初等教育資料」
- 「中等教育資料」
- 小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 [文部科学省 平成29年7月]
- 中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 [文部科学省 平成29年7月]